

「師走からの連想（陽水と蕪村）」

旧暦の十二月は、「師走」と呼ばれます。その語源には、いろいろな説があるようですが、年末に祖先の霊を弔う習慣があり、お坊さん（師）が走り回っていたことから「師馳せ月」が転じたとする説が有力なようです。私の小さい頃は、年末で仕事の清算や年越しの準備のために、いつもは落ち着き払っている師匠や学校の先生も走り回るからそう呼ぶのだ、と聞いていましたが、それは俗説のようです。いずれにしても、年末で、師と呼ばれる人を含めて皆が東奔西走するような慌ただしさを感じる月であることは、間違いないでしょう。

ところで、「東奔西走する月」と聞くと、私の頭にはすぐに井上陽水の「東へ西へ」という歌が浮かびます。前にも書きましたが、私が中学校2年の時に初めて行ったのが、陽水のコンサートでした。そこで生ギター一本の弾き語りで聴いた「東へ西へ」は、今でも当時の衝撃とともによく耳の奥で鳴り響きます。さびの部分の「ガンバレ みんなガンバレ 月は流れて東へ西へ」というフレーズは、時々私に気持ちを奮い立たせてくれる応援歌でもあります。

「東へ西へ」とくれば、与謝蕪村の名句「菜の花や月は東に日は西に」が思い浮かびます。しかし、これは春の句で、季節はずれです。蕪村の冬の句として、彼が讃岐路を旅していた時に、香東川の渡し場で詠んだ句をご紹介します。

「炬燵^{こたつ}出て早あしもの野河^{のがは}かな」

この句の前書きに、讃州高松の「あるじ夫妻の隔^{へだ}てなきころざしのうれしさに…」とあります。炬燵に見立てられた、お接待の心の温かさが伝わってくるようです。蕪村は讃岐を気に入っていたようで、特に明和3年（1766年）からの2年間は、蕪村の讃岐時代とも言われているそうです。讃岐野の師走を、蕪村はどんな風に過ごしていたのでしょうか。

20年前にヒットした陽水の「最後のニュース」という曲は、「闇に沈む月の裏の顔をあばき青い砂や石をどこへ運び去ったの」という、これまた月が出てくる不思議な詩で始まります。師走という月が穏やかに過ぎ、今年の高松における「最後のニュース」が、明るい話題であることを願いたいと思います。